

「8050問題」

80歳になっても自分の歯を20本以上残そうという、健康増進を目的とした「8020運動」^{はちまるにいまる}はお聞きになったこともあると思いますが、最近クローズアップされている「8050問題」^{はちまるごうまる}はご存知でしょうか？

1. 「8050問題」とは？

進学や就職に失敗したことなどをきっかけに、家にこもって外部との接触を断つ、いわゆる「ひきこもり」が依然として社会問題となっています。厚生労働省はその定義を「仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせず、6カ月以上続けて自宅にひきこもっている状態」としており、比較的若年層における問題であるとの感もありますが、ひきこもりの状態が長期化し相応の年齢になり、さらに高齢となった親の収入が途絶えたり、病気や要介護状態になったりして経済的に一家が孤立・困窮する例が増加しています。このようなケースが「80代の老親と50代のひきこもりの子」を意味する「8050問題」として顕在化しているのです。内閣府はひきこもりに関する実態調査をこれまで39歳以下に限って行ってきましたが、2018年度に40歳～59歳を対象とした初の調査を行うとしています。

2. 実態はどうなっているのか？

特定非営利活動法人「KHJ 全国ひきこもり家族会連合会」の調査によると、ひきこもりとなっている人の平均年齢や期間は年々上昇・長期化しており、2016年ではそれぞれ32.7歳、10.8年、また30代以上の割合が63.1%と半数を超え、40代以上の割合も22.8%となっています（図表1参照）。

一方、厚生労働省の調査によると、65歳以上の者がいる世帯の世帯構造について、「単独世帯」「夫婦のみ世帯」とともに「親と未婚の子のみ世帯」が年々増加してきています（図表2参照）。もちろん、親と未婚の子のみ世帯の「子」がすべてひきこもり状態であるわけではありませんが、8050問題の背景になっていることがうかがえます。

厚生労働省はひきこもり対策に取り組み、各都道府県などでも「ひきこもり地域支援センター」を整備するなど、ひきこもり対策・支援策を進めています。高齢（化）社会がますます進展している現代では、行政だけではなく地域社会なども含めた総合的な対応が必要であると考えます。

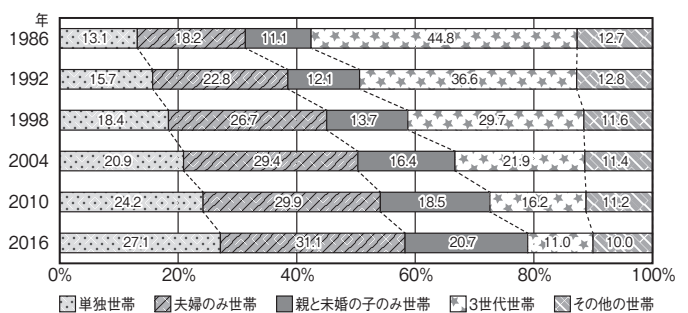
図表1 ひきこもりに関する平均年齢等の年次推移

	平均年齢 (歳)	平均ひきこもり 年数(年)	30代以上 割合(%)	40代以上 割合(%)
2004	27.6	-	37.1	-
2006	29.5	8.6	49.8	-
2008	30.1	9.0	-	-
2010	30.3	9.6	55.9	10.4
2012	31.5	10.3	-	-
2014	33.1	10.7	65.8	23.1
2016	32.7	10.8	63.1	22.8

KHJ 全国ひきこもり家族会連合会「長期高齢化したひきこもり者とその家族への効果的な支援及び長期高齢化に至るプロセス調査・研究事業報告書」より

※「-」は未調査の項目

図表2 65歳以上の者がいる世帯の世帯構造の年次推移



厚生労働省「平成28年国民生活基礎調査の概要」より

※2016年は熊本県を除いた数値

閑話ひとつ

- ▶ NHK スペシャルの「人体」を楽しみにしている方も多いと思います。
- ▶ 医学や撮影技術の進歩には驚くばかりですが、第3集「骨が出す最高の若返り物質」では、何と！骨が記憶力アップや免疫力を高めるメッセージ物質を作り出している、若さを司る臓器であるとのことでした。まさにパラダイムシフトです。
- ▶ 骨は人間の活動を刺激により感知して再生を繰り返すようで、つまり老化するから足腰が弱るのではなく、歩いたり走ったりしないと、骨がその個体は弱体化したと判断し、メッセージ物質を出さなくなり結果として老化する。これが「適者生存」という、人類進化の法則であるとの衝撃的な事実でした。
- ▶ これからは骨に愛想を尽かされないように、昨年膝痛でお休みしていたジョギングを再開しようと決意しました。骨折り損にはなりませんね。

(MW)